

## 温熱化学療法が奏功した腹膜播種を伴うスキルス胃癌の1例

戸畑共立病院 がん治療センター 梶田 義士、今田 肇

臨床工学科 大田 真、溝口 勢悟、三浦 幸恵

青木 姫子、渡邊 千代美

症例は72歳代男性。2017年1月進行胃癌の診断、造影CTで腹膜播種の診断となり根治的な手術は困難な状態。2017年2月よりXELOXによる温熱化学療法（高気圧酸素療法併用）を開始するも倦怠感や食欲低下、下痢が出現。次コースより減量するも副作用遷延、さらに減量を行う事で副作用軽減傾向であったが、依然治療後1週間は食事がとれない状態であった。2017年4月の造影CTでは腫瘍の縮小が認められ、腫瘍マーカーも減少した。減量で症状は軽減するも骨髄抑制の遷延が認められ薬剤はさらに減量、最終的にはオキサリプラチン42%量、カペシタビン60%量とし、22コースまで施行、その後S1を半年間内服した。温熱療法は原発巣に対し計55回施行、出力 $918\pm 118.8W$ 、50分で施行。高気圧酸素療法はXELOX施行時に計22回施行、計90分（加圧15分・維持60分・減圧15分）で施行。最終的に病変は消失しCRの状態であり、現在無治療で経過観察を行っている。

化学療法の副作用で薬剤減量を余儀なくされるも薬剤奏功が見られたのは、温熱療法の薬剤増感効果によるものと考えられた。また同日レジメンを22コース（1.5年）行えた事も、温熱療法の薬剤耐性遅延効果と考えられた。